

1. 主題名 「生命の尊さ」 内容項目D- (19)

2. 資料名 「貫戸朋子さんの葛藤」(一部編集)

3. 主題設定の理由と資料の概要

中学校2年生は、自分と他人との違いを強く意識する時期であり、自分の意見を率直に伝えることや他と異なる自分を表現することに葛藤したり躊躇したりする時期である。本学級の生徒は、グループなどの話し合いの場面において物事を感情的に捉えるのではなく冷静に客観的に見つめながら意見交換することができる。しかし、ルールなど考える基準が明確にある場合は、問題や物事を客観的に捉え自分の考えを伝え合うことができるものの、考える基準がない中で自分たちの意見を伝え合うことには、少し臆する傾向がある。そのような場合には、先に発言した生徒の考えに安易に同調して話し合いが終わってしまったり、表面的な意見交流をして終わってしまったりする時もある。正解がないような問題にも自分自身の経験を振り返りながら積極的に立ち向かい、仲間との交流を通して自分自身のよりよい生き方や考え方を探っていく姿勢を養う必要がある。生徒はこれまでの経験や道徳の授業を通して「生命は大切なものだ」、「生命はかけがえのないものだ」という思いを深めてきた。生命の有限性や連続性に主に焦点をあてて「生きていることへの感謝」や「生命そのものを大切にしていきたい」という人間が自然に抱く「生命」を大切にする気持ちを育むというねらいは概ね達成してきたと思う。しかしながら、「尊厳死」や「臓器移植」のような、生命の尊厳と生命の質という葛藤を生むテーマに触れる機会はなかった。「生きること、生命とは何か」という本質的な問いに向き合い、生命に対しての考えをさらに深めさせたいと考えている。

本資料は内容項目D- (19)「生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること」をねらいとしている。今回は、とりわけ生命の持つ尊く厳かで侵し難い「尊厳性」に焦点をあてていきたいと考えている。生命の「尊厳性」について考えることは、正解がなく、時に葛藤を生むことであると考えてるが、広い視野から生命を多面的・多角的に考えることが、表面的に「生命を大切に」と捉えるのではなく、生命を心から尊重する態度を養うことにつながると考え、この主題を設定した。

このような態度を養うために、指導において特に重視した資質・能力は、「考えた解決策が、関係者や場面・状況を配慮したうえで最善のものであるかを検討し、納得解を求めていく力」である。貫戸さんの気持ちを、「医師、酸素ボンベ管理者、少年の家族」という3つの立場から考えることで、安易に1つの立場からの見方や考え方を捨てさせないで、今も悩み続けている貫戸さんの深い葛藤に気付かせていく。また、登場人物が置かれた、自分の選択次第で1つの命、または、その後の不特定多数の命を失う可能性がある状況を考えさせ、命は功利主義で捉えてよいのかなどの気付きを与えていく。本題材の授業を通して、生命を救う存在である医師が、「死」を認め「生」をあきらめることに計り知れない葛藤があり、その葛藤が生命を大切にしているからこそ生まれる感情であることに気付かせていきたい。それぞれの立場から考えた時に、1つの生命に対しての行動や考えは異なってくるが、いずれも、生命を大切にしたい、尊重したいと思う気持ちの深さゆえの行動や考えになっているということについて考えることを通して、生命の尊厳について理解を深め、自他の生命を尊重し、大切にすることを養う姿勢を育んでいきたい。

資料について

本時で用いる資料は、国境なき医師団の活動でスリランカのマドゥーの地に派遣された医師、貫戸朋子さんの実話をもとに作られている。十分な医療機器が整っておらず、患者もたくさん並んでいる状況で、苦しそうに呼吸をする感染症に侵された5歳の少年が貫戸さんのもとに治療を受けにくる。残り1本しか酸素ボンベがない状況で、酸素ボンベを与えたとしても助かる見込みのない少年に酸素を与えるべきか否かという局面で、自分の判断によって、その少年の命、あるいはその後の不特定多数の命も失われてしまうかもしれないという貫戸さんの葛藤が描かれている。貫戸さんの葛藤や、少年を取り巻く様々な立場の人の状況や心情を考えることで、生命が決して優先順位をつけられるものではないということについて深く考えさせられる資料である。

4 授業の実際

1. 目標

生命の尊厳について理解を深め、自他の生命を尊重する態度を育てる。

2. 過程

学習活動【学習形態】	◇発問 ◆中心発問 △指示・説明	○教師の手立て
1. 貫戸さんと国際人道支援について知る。 【全体】	◇この女性は、どのような人だと思いませんか。 ◇国際人道支援について知っていますか。 ・海外で人を助けることだと思う。 ・貧しい国でボランティアをすることではないだろうか。	○最新の設備が整っていない国での医療行為であるということに気付かせるために写真や地図を使って簡単に説明する。
2. 資料を読む。【全体】	△資料を読みましょう。	
3. 3つの立場から、貫戸さんが考えていたことを想像する。 【ジグソー→グループ】	◇貫戸さんはそれぞれの立場で、酸素ポンペを切るか、切らないか判断を迫られたとき、どのような気持ちだったでしょう。 ・必要な人はこれからも出てくるかもしれないので、一本しかない酸素ポンペを残しておきたい。 ・たくさん並んでいる患者を見なければいけない。 ・自分の子どもを救ってほしい。	○状況を明確にするために「酸素ポンペ管理者」「医師」「家族」の3つの立場に絞って考えさせる。 ○それぞれの立場からの見方を広げるために、最初に同じ立場から考えている生徒と交流を行う。その後、貫戸さんの葛藤を実感させるために異なる立場から考えている生徒と意見を交換させる。
4. 貫戸さんの葛藤について考える。 【個→全体】	◆貫戸さんが今も悩み続けているのはどのような気持ちがあるからでしょうか。 ・他の子が助かる可能性はあるかもしれないけど、今いるその子を見捨てることはしたくなかった。 ・人の命を自分の手で終えたくはなかった。 ・一人の命も多くの命も大切だから。	○命に目を向けるために貫戸さんは命の終わりを決定したことを確認する。 ○貫戸さんの悩みの理由について深く考えるために、貫戸さんが、それぞれの立場からの思いで交錯していたことや命を救う立場であるのに、結果的に一つの命の終わりを決定したという事実を板書で確認する。
5. 本時の振り返りをする。 【一斉】	△今日の授業で感じたことや考えたことを「心のクローバー」を染めながら自分の言葉でまとめましょう。	

3. 評価とその方法

生命の尊厳について理解を深め、自他の生命を尊重しようとしているかを、学習内容4, 5の発表や記述内容から評価する。

5. 生徒の振り返り

中心発問の「貫戸さんが今も悩み続けているのはどのような気持ちがあるからか」に対して生徒が考えた内容は、以下の通りに分類された。

主な内容	人数（人）
自分の判断に対する後悔、悔しさ、未練	6人
自分の判断に対する不安、自信が持てない気持ち	11人
少年に対する罪悪感、申し訳ない気持ち	5人
少年に対する「助けたかった、救いたかった」という気持ち	4人
1つの命より、多数の命を大切に良かったのかという気持ち	5人

【生徒の記入例】

- ・自分のしたことが正しいのかわからず後悔しているからだと思う。人の命と関わる仕事だから独断で動くべきではなく、考えが違っただとしても他の人の考えも尊重しなければいけないため。
- ・その時の判断で人が一人亡くなってしまったことで、自分の判断が間違っていたのかもしれないという気持ちが生まれてしまったから。
- ・もし少年にもっと長く酸素を与えたら状態が良くなったかもしれないという後悔があるから。
- ・医師は「命を助ける」仕事だから、「命を助けるために、一人の命をうばってしまう」ことが果たして医師として良い選択だったのかという気持ちがあるから悩み続けているのだと思う。
- ・まだ自分の行動が医師として正しかったのかという迷いや不安が消えていないからだと思う。
- ・助かったかもしれない子どもの命を自分の手で絶ち、治療をあきらめたことへの罪悪感。
- ・「その子どもを救いたかった」という思いや、医師として病気の人を救えなかった悔しさがあるから、少年を救わずに酸素ボンベを切ってしまう良かったのか悩み続けているのだと思う。
- ・本当に一人だけの命より、多数の命を救うことが正しいのかという気持ちがあるから。

6. 授業を終えて—考察—

実践を通しての成果（○）と課題（▲）は以下の通りである。

- 3つの立場から考えることで、安易に一つの立場を切り捨てるのではなく、様々な側面から考えて意見を述べる生徒が多かった。また、グループで意見を交流するだけでなく、自分で意見を考える時間を十分に取ったことで、生徒の自己内対話を促すことができたと感じた。
- 貫戸さんの葛藤が続く根底には、誰もすべての生命を大切にしたいという思いがあるという点に気付く生徒が多かった。その点から、本時の目標は概ね達成されていたと思う。
- 生徒は、貫戸さんの葛藤を考えることを通じて、正解がない問いに対して、自分が今後どのような決断をしていくかが大切だと感じていた。今回の貫戸さんが置かれた状況だけではなく、その時自分が置かれた立場や状況を想定しながら、自分が納得できる行動をしていきたいと感じる生徒が多かった。
- 今回ジグソー的手法を用いたことで、一つの事柄に対する見方が広がったり、考えを深めたりすることができたと思う。通常のジグソー法では、それぞれの立場からの考えを深めることで問題解決を目指しているが、今回の授業では問題解決が不可能な貫戸さんの葛藤を体験するために、それぞれの立場からの考えを深めていった。生徒は、答えが出せない問題について相手の考えも踏まえながら深く考えることができたと感じる。そのような点で、今回のジグソー的手法は有効な手段だったと感じる。
- ▲ 発問が二つとも「どのような気持ちか」という気持ちを問うものであった。生徒はこのような発問に慣れていたため、教師の意図に沿って貫戸さんの内面的な心情について考えていたが「気持ち」を問われた場合、「ドキドキした、緊張した」という外面的な心情についても考えることができる。生徒に考えさせたい価値を明らかにし、発問の問い方や言葉の選択を吟味する必要があると感じた。
- ▲ 生徒が、他との関わりを通して価値が変容したか、また考えが深まったか、生徒自身も自覚することができるような本時の流れや振り返りの工夫をする必要がある。